

# 島原市まちひとしごと

## 創生総合戦略

平成27年10月策定

# 1号機関車

島原市まち・ひと・しごと総合戦略には、「広域交通網・二次交通の充実による交流の拡大に向けた取り組み」のひとつとして、「1号機関車をモチーフにした観光列車の導入」を盛り込みました。

### 1号機関車とは…

明治5年に新橋⇄横浜間を走った国内第1号の機関車。

明治44年に国鉄から島原鉄道に払い下げられ、島原半島を走っていました。

その後、国鉄が博物館充実のため返還を求め、当時の島原鉄道社長であり、後の初代島原市長でもある植木元太郎が車体に「惜別感無量」のプレートをはめて、諫早駅で盛大な送別式を行った、というストーリーが島原にはあります。

1号機関車は、阿川弘之氏による「きかんしゃやえもん」のモデルになったとも言われており、現在は埼玉県大宮市にある鉄道博物館で展示されています。



「しまばらん」は、漫画「妖怪ウォッチ」作者小西紀行先生がプロデュースした島原守護神キャラクターです。



みんな目指すこと

編集・発行

島原市 市長公室 政策企画課

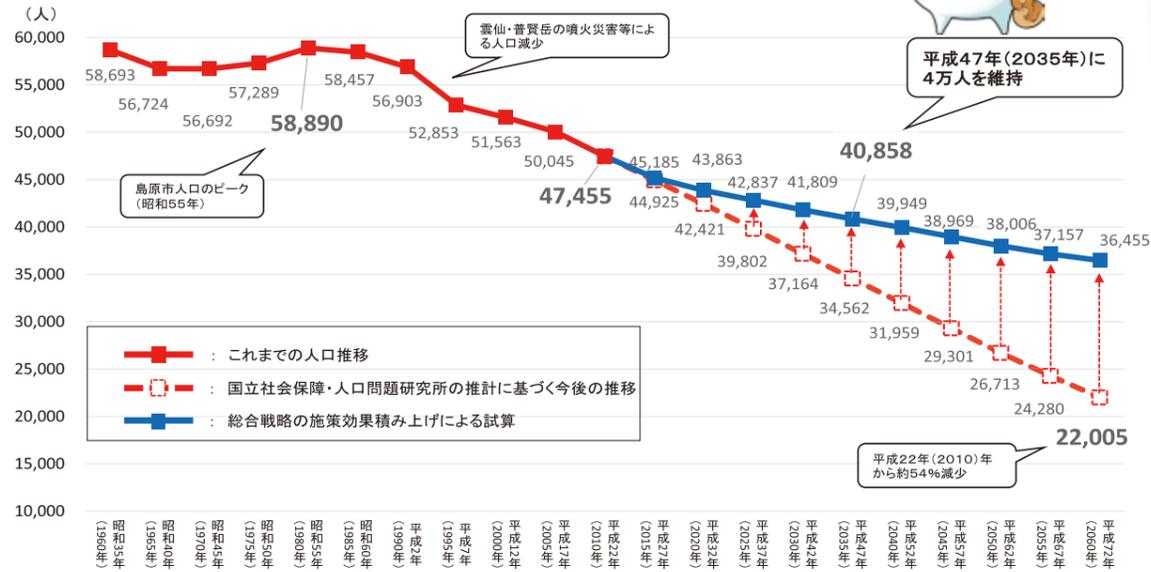
〒855-8555 長崎県島原市上の町537番地 TEL(0957)62-8012/FAX(0957)62-8115  
URL <http://www.city.shimabara.lg.jp>



# 島原市まちひとしごと創生総合戦略

平成27年10月策定

## 島原市人口ビジョン



ピーク時に5万9千人近くあった島原市の人口は、平成22年(2010年)には47,455人となっており、平成72年に2万2千人程度まで減少するとの推計もあります。

総合戦略に基づく各種施策・事業の実施により、平成47年(2035年)に人口4万人以上が確保されることを当面の目標とします。

基本的な考え方と構成だよ!

### 総合戦略

人口減少により

## 「島原市が消滅してしまうかもしれない」

その危機感を市民全体で共有し、市民一人ひとりが自らの問題として取り組みを進めるため、島原市の基本的目標や基本的な施策の方向、具体的な施策をまとめた「島原市まち・ひと・しごと創生総合戦略」(以下「総合戦略」という。)を策定します。

**政策4分野**

- ①しごとをつくり、安心して働けるようにする
- ②新しいひとの流れをつくる
- ③若い世代の結婚・出産・子育ての希望をかなえる
- ④時代に合った地域をつくり、安心な暮らしを守る

**主要施策**

- 観光客誘致策等を一元的に担う組織の設立
- 「儲かる一次産業」へ
- 島原版コンパクトシティと交通ネットワークの形成
- 新たな奨学金制度の創設

### (冒頭文) 島原2060年への「若者の誓い」

私たちは島原に生まれ、島原に暮らし、島原で働いています。島原には、街なかのいたるところに湧水があります。島原城の天守閣に登れば、一方には眉山や雲仙・普賢岳、一方には干満の差が日本一と言われ、豊富な魚介類をもたらす有明海を間近で望むことができます。有明海から昇る朝日は美しく、日の出を楽しみながらウォーキングされている方もいます。空気は澄み渡っていて、夜には、綺麗な星空を見上げて家に帰ります。島原温泉の足湯では、会話を楽しむおじいちゃん・おばあちゃんの方を偲ぶ、精霊流しという伝統行事があります。地域で協力して藁船に島原特有の切り子灯籠を飾った精霊船を担ぎ、町内を練り歩き、幻想的な有明海に流します。島原では、近所の方や友人・知人が、野菜や果物、魚をお裾分けしてくれます。その時の何気ない会話は、時々面倒くさいこともあるけれど、親から子、子から孫へ受け継がれ、島原の絆となっています。外出すると知り合いによく会います。子どもを連れてまちを歩くと、誰かが気軽に話しかけてくれます。火事の際には、地域の消防団はもとより、消防団OBや地域住民が結集し消火活動を行う、それが島原の人です。

島原は、眉山が崩壊した島原大変、雲仙・普賢岳の噴火災害という二度の大災害を乗り越えてきました。雲仙・普賢岳噴火災害の中、私たちは、火山灰や噴石から身を守るために、ヘルメットやゴーグル、マスクを着用して学校へ通いました。夜間に赤く燃え上がる溶岩、日夜関係なく発生する火砕流・土石流は、とても恐ろしく、今でも脳裏に焼き付いてい

ます。「島原はもうだめかもしれない」、その思いを抱きながらも、必死に乗り切ってくれたのは私たちの親の世代、そして、大災害からの復興を成し遂げることができたのは、全国の皆様からの温かいご支援の賜物でした。

私たちが島原で暮らしている理由は、島原が好きだから、島原に生活したいからという思いからです。しかしながら、就職や修学の場が無いことで、高校卒業後、多くの友がふるさと島原を離れ、市外に拠点を移しています。

島原は、「過疎地域」に指定され、将来は人口が減少して消滅の可能性すらあると予測されています。

島原から「ひと」が減ると、どうなるか。農業や漁業では、後継者がいなくなります。島原にいな「島原ではないどこか」の野菜や魚介類を食べなければなりません。観光客を島原の恵みでもてなすことも出来ません。お裾分けの文化も薄れてしまうかもしれない、地域のつながりが弱くなってしまふかもしれない。おじいちゃん・おばあちゃんの面倒を見たくても、見る人がいなくなります。

空き家が増えて景観が荒れ、経済が縮小して仕事減少します。私たちの子どもは島原に帰って来なくなるかもしれません。災害を乗り越える力が失われてしまうかもしれません。

私たち若者は、地域の担い手として大きな期待を寄せられていますが、一方で、日々の生活に手いっぱいであり、地域のことを考える時間はあまり多くありません。「人口減少」、他人事のように感じてしまう若者が多いと思います。でも、このままいけば、島原のことを皆で考える

機会はもう、来ないかもしれません。

私たちは、「しなければならないこと」「できること」について考え始めました。「しなければならないこと」、私たちは、将来の島原で「何が大切か、何がいらぬのか」を知る必要があります。

私たちがこれからの島原で大切にしたい価値観は何なのでしょう。親から受け継いだ家業や土地を守りたい人、稼ごうたい人、外からの人材を求めたい人、そのままの姿でいい人。色々な意見が出ました。昔の島原の姿に、これからの島原のあるべき姿があるのかもしれません。まだ、答えは出ていません。

でも、「できること」はあります。私たちが島原に残った理由は、やさしい島原の人、美しい島原のまちが好きだから、親が一生懸命働く姿、笑う姿や泣く姿、何より幸せそうな姿を見て育ち、私たちが同じようにしていきたいという思いが根付いているからです。育ててくれた地域や親に感謝しながら、私たちの子どもの世代にも温かみのある、一生懸命働く私たちの背中を見せ続けていくことはできます。そして、その姿が、これからの日本のあり方につながっていくように、と願っています。

私たちはこれまでの世代に感謝しています。そして、これからの世代にも島原を生きてもらいたいと思います。そのために、私たちが考え始めた内容を周りに伝え、これからの島原の価値観を生み出していきたいと思っています。そして日本中の人たちに発信していきたいと思っています。残された時間は多くありません。島原のことを皆で考える機会は、今しかありません。



## 【湧水を核とした】

### 島原市ブランドイメージ

